

幼児を持つ母親の対人関係と 子育てに対する態度

佐藤 朗子

Mothers' Close Relationships and Parenting

Akiko Sato

問題と目的

子どもとその主たる養育者（我々の文化においては多くの場合は母親）の関係の質には、当然ながら個々のケースによる差異がある。ある場合には適応的で良好な関係が築かれているであろうし、また他の場合には、調和のとれない、葛藤の多い関係が形成されているかもしれない。このような、子どもと養育者との関係（以後は便宜的に「母子関係」と呼ぶ）を記述または評価するために、心理学や社会学において、これまでいくつかの指標が用いられてきた。その一つが育児ストレス（Cutrona, 1984；野澤, 1989；他）であり、また、育児不安（牧野, 1982）である。育児ストレスは、「子どもや育児に関する出来事や状況などが母親によって脅威であると知覚されることや、その結果母親が経験する困難な状態」（佐藤・菅原・戸田・島・北村, 1994）と定義され、また育児不安は、「子どもや子育てに対する蓄積された漠然とした恐れを含む情緒の状態」（牧野, 1988）と定義されている。他方で、ストレスや不安といったネガティブな側面ではなく、母親としての自尊感情（Shea & Tronick, 1988）のように、ポジティブな側面に注目する立場もある。いずれにしても、母親側の心理状態に注目する指標である点において、育児ストレス、育児不安、自尊感情は一致している。これらの測定は、質問紙法や面接法による調査によって行なわれる。

上で述べた指標とは別に、子ども側の心理発達の状態に焦点をあてた指標もある。子どもが母親に対して形成する愛着の質がその代表的なものである。この立場では、母子の関係性が子どもの中にどのように内在化しているかを測定するために、実験場面（Ainsworth, Blehar, Waters & Wall, 1978）や日常場面（Waters & Deane, 1985）における子どもの行動が観察される。「支えてくれる母」・「受容してくれる母」の確かなイメージが子どもの中に形成されていれば、子どもは母子の一時的分離にもうまく適応し、また母子関係を拠り所として積極的に外界を探索することができる。

また、母子の相互作用そのものが指標として取り上げられることもある。母子のスムーズな相互作用を導く母親の特徴として、子どもの出すシグナルに対する受容や応答性（Kochanska, 1998）、あるいは侵入的な要求（Ladd & Ladd, 1998）などが、相互作用場面を通じて評定され

る。これらの母親側の特徴が、母子関係の質に作用すると考えられている。

上に述べてきたことを別の視点から見ると、次のように言うことができる。すなわち、子ども（乳幼児）側の状態に着目するためには、必然的に直接観察できる行動指標を用いることになる。しかし母親側の状態に着目する場合には、言語的な報告（多くは質問紙法によるが、面接による場合もある）を指標として用いるものと、直接観察できる母親の行動そのものを指標とするものとに大別されることがわかる。行動観察には、母親自身の自己認識とは独立に、客観的に養育行動を評定できるという利点がある。しかし行動水準では必ずしも顕在化しないような母親側の心理状態について詳細に検討するという目的のためには、言語的な報告が用いられることとなる。

ところで、母親の心理状態は、ストレスや不安などのネガティブな情緒の側面と、自尊感情のようなポジティブな情緒の側面とに、必ずしも単純に二分されるわけではない。また、ポジティブな情緒的体験が必ずしも母子の安寧のために常に貢献し、ネガティブなものが常にそれを阻害するとも言い難い。たとえば、母親と夫との関係と母親と子どもとの関係をあわせて検討した大日向（1988）によれば、母親たちの中には、夫との精神的な絆を喪失しており、そのことに付随して子どもに対しては「自分のすべてを投影するような濃密な」関係を形成していると思われるケースが一定の割合で見られることが明らかにされている。このような場合、子どもへの密着それ自体は、必ずしもネガティブな情緒としては体験されないわけである。むしろ、子どもに期待を投影し、子どもを生きがいとすることは、母親自身にはポジティブな情緒を伴って体験されるかもしれない。けれども母親の子どもへの密着は結果的として、子どもへの干渉や過度の介入を生み出す。そして母親による子どもへの介入や過保護の傾向は、子どもの自立性や社会性の発達の遅れと関連することが指摘されている（柏木, 1988）。

また、西澤（1994）は、虐待傾向のある親の特徴について概観する中で、子どもを虐待する傾向のある親は、子どもに対する非現実的で不適切な期待を持つ傾向が強いことを指摘している。これは、子どもに親の情緒的欲求を満たしてくれることを無自覚のうちに強く期待する傾向であり、子どもの発達に対して好ましい要因として機能するとは言い難い。ところが、この期待はそれ自体では情緒的にニュートラルなものであるし、子どもが敏感に親の期待を察知して行動を調節している限りにおいては、ポジティブな情緒を伴って親に体験されるだろう。しかし、ひとたび子どもが親の期待に添わない行動を示せば、逆にネガティブな情緒をもって受け止められることになる。以上のようなことを考慮に入れると、母親の心理状態をより詳細に検討するためには、必ずしも母親にとって悩みや心配とは認知されないような心理的傾向をも指標に含めて考えることが必要だとわかる。そこで本研究では、このような視点を含めた測定尺度を新たに作成することを目的の一つとする。

さて、母親の効果的な育児行動や育児に対する良好な態度のためには、夫や友人を含め母親をとりまく周囲の人との対人関係のあり方が重要な要因となる。子育てにあたる母親が、夫から十分な情緒的サポートが得られていると感じていたり、育児への協力が得られていると感じている場合には、母子の愛着が安定的に発達し、母親としての精神的健康や自尊感情も高まることなどが示されている（Howes & Markmann, 1989; Levy-Shiff, Dimitrovsky, Shulman, & Har-Even, 1998; Shea & Tronick, 1988, 他）。これらの結果はしばしば、以下のようなソーシャルサポート研究の枠組みで説明される。すなわち、子育てにおける困難な問題に対処する母親に対して、周囲の人が情緒的・道具的サポートを与えることで、母親が状況を脅威的と認知する程度が抑えられたり、また母親の効果的なストレス対処が促進されたりする。結果として、母親の悩みや負担感が低められ、内的体験はより好ましいものとなる。

ところで、上述のようなソーシャルサポート研究の枠組みに対して、人の心理的適応状態に影

響する主要な要因は人間関係における支援的な側面ではなく、むしろ人間関係における悩みや葛藤の側面であることを示す研究がある。人間関係においてどの程度サポートが得られるかではなく、人間関係においてどの程度悩みや葛藤があるかということが、個人の心理的な不健康状態に強く関連することを、いくつかの研究が示している（Vinokur & van Ryn, 1993；Rock, 1984）。あるいは、Ruehlman & Wolchik（1988）は、特定の重要な他者からのサポートは個人の精神的健康状態の良さと関連し、同じ重要な他者との葛藤の程度は心理的に不健康な特徴と関連することを示した。これらはいずれも、人間関係が人の心理状態に与える影響を検討する場合には、その関係の支援的な面だけではなく、葛藤的な面をも考慮に入れる必要があることを示唆している。人間関係において、いわゆる「仲の良さ」、「関係の良い面」というのは、必ずしも「確執やこだわり」、「関係の悪い面」と対極ではないということである。

本研究では、上で述べた立場に立脚して、母親の対人関係を測定するための枠組みとして、愛着研究の枠組みを用いることとする。愛着理論はそもそも乳幼児と養育者との関係についての理論であったが、今日では、成人どうしの親密な関係のなかには愛着の要素が確かに存在する（Ainsworth, 1989）し、また成人にとってもそれが適応や発達を支える重要な要因として機能していることが、広く同意されている。愛着とは、ある特定の人どうしのあいだの心理的・情緒的絆のことをいい、この絆は、人が恐れや不安を抱いたり、何らかの課題に直面した時などに、情緒の再統制を図り、結果として課題への効果的な対処を可能にすべく機能するとされる。重要な対象との愛着関係が良好である場合、すなわち、相手に対して安心感を抱いており、相手を必要とするような何らかの恐れや不安やストレスなどの状況下では、いつでも相手に援助や支えを求めることができる場合には、ストレス下において、情緒がよく統制され、問題への対処が促進されることになる。しかし、愛着関係が不安定であったり拒否的である場合には、情緒統制がうまくいかず、結果として問題への非効果的な対処がなされることとなる。こうした愛着研究の枠組みでは、愛着の良好さとともに、不安定な面や拒否的な面をも重視して測定することが多い。青年や成人どうしの愛着関係をテーマにした研究は、人間関係における安定的な面と、不安感や不安全感、葛藤、嫌悪などの不調和な面とを、あわせて測定するための一つの枠組みを提供していると言える。

以上を踏まえ、本研究では、まず第一に子育てに対する内的体験を測定するための尺度を作成し、第二にこれと母親の対人関係の質との関連を検討することにする。（註1）

方 法

(1) 調査対象と調査方法

幼稚園児を持つ母親110名に対し、園児を通じて質問紙を配布し、郵便によって回収した。調査は無記名方式である。最終的に72名の母親からの回答を得た。回収率は65%であった。回答者の平均年齢は34歳（範囲：23歳から45歳）、子どもの平均年齢は5歳0ヶ月（範囲：3歳3ヶ月から6歳8ヶ月）であり、性別は男児26名（37%）、女児45名（63%）であった。なお園児の母親のおよそ6割は、仕事を持たないいわゆる専業主婦である。

(2) 測定尺度

子育てへの態度（項目内容は表1を参照）： 自分の子ども（特定の子ども）と関わる中での内的体験の様相を測定するため、大日向（1988）、西澤（1994）、Jorgensen（1992）を参考に、

註1：本論文には、日本教育心理学会第39回総会にて発表したデータを再分析した結果が含まれている。

21項目から成る尺度（5件法）を作成した。当初は、(1)子育てへの積極的受容（表中の項目番号1, 5, 10, 13, 14, 17, 21）、(2)子どもに対する否定的意味づけ（表中の項目番号4, 7, 8, 11, 15, 16, 19）、(3)子どもへの密着・分離困難（表中の項目番号2, 3, 6, 9, 12, 18, 20）の3つの下位尺度を想定した。(1)は、母親であることや子育てに対してポジティブな内的体験をし、育児を積極的に受容する傾向、(2)は子どもを自分の一部と見なしたり、自分の不安を投影したりするために、子どもとの分離が困難であるような傾向、(3)は子どもへの期待が強く、また子どもへの敵意の投影のために、子どもの行動を否定的に解釈しがちな傾向を意味する。子どもへの強い期待と子どもへの敵意の投影は、いずれも、西澤によって虐待傾向のある親の特徴として指摘されているものである。下位尺度の(3)は従って、育児におけるネガティブな情緒的体験に関する項目群から成っているとは言っても、育児における負担感や焦燥感・自信喪失感といった、「育児ストレス」を直接射程に入れたものではない。むしろ、育児中の子どもとの対人葛藤に対する母親の否定的解釈という側面を強く含んでいる。すなわち、育児という対人関係において必然的に生じる、母親の自我と子どもの自我との葛藤を、母親がどう感じ、どう受け止めているか、母親が自分の意志と子どもの意志との相互独立性をどのように意識しているか、母親自身の期待や投影から、どの程度自律的であるか、などの傾向に関わる内容である。

なお、調査実施後の尺度分析によって、当初の尺度構成とは幾分異なる、4つの下位尺度が構成された。詳しくは「結果」にて述べる。

愛着尺度（項目内容は表2を参照）：一緒にいて最も安心できる人として特定の対象を一名選択し、その人との関係性について5件法で評定を求めるものである。下位尺度は、(1)安定した愛着（相手に対して安心感を感じており、恐れや不安や悲しみなどが生じた時には、必要に応じて相手に依存したり接近したりして、安定感の回復を図ることができる傾向）、(2)不安（相手との関係性に不安を抱いたり、またその人との関係を離れた個人としての自己に不安を感じたりする傾向）、(3)拒否（相手への拒否傾向、そして愛着的関係そのものを拒否する傾向）の3つがある。佐藤（1993）による。

結 果

(1) 尺度の検討

初めに測定尺度に関する検討を行った。子育てへの態度尺度を構成する21項目の得点について、主因子法による因子分析を行いバリマックス回転を施した。固有値と寄与率の推移、および因子解釈の容易さから、4因子を抽出した。因子分析の結果は表1に示してある。各因子について、負荷量の絶対値が.40以上の項目について得点を合計し、尺度得点とした。複数の因子に基準値以上の負荷を示した項目については、より値の高いほうの因子の構成項目とした。結果として下位尺度は当初の想定とは幾分異なる以下の4つとなった。(1)子育ての積極的な受容：子育てを楽しみ、母親としての自分に自尊感情を抱く傾向。(2)子育てや子どもへの否定的意味づけ：子どもの行動の意味をネガティブに解釈したり、子どもに対して逆転的な役割を期待する傾向。すなわち、母親自身の敵意を子どもに投影してしまい、結果として、子どもの行動を自分への敵意の現われであると解釈してしまいがちな傾向や、子どもに自分の欲求を満たしてほしいと期待する傾向。(3)子どもとの境界の弱さ：子どもを母親自身の延長にある存在と見なし、結果として子どもの独自の意志や自主性を認めにくいような傾向。(4)環境への不安：子どもを取り巻く外界に対して漠然とした不安を常に感じる傾向。

以上の4つの下位尺度のうち、(1)と(2)は、初めに想定した尺度と内容的にほぼ一致する。(3)と

(4)は、子どもへの密着・分離困難という同一の尺度として想定したが、結果として、(3)の境界の弱さと分離困難を表す傾向と、(4)の環境への不安を抱く傾向とに分かれた。各下位尺度の α 係数は、「積極的受容」が.71、「否定的意味づけ」が.69、「境界の弱さ」が.53、「環境への不安」が.73であった。下位尺度間の相関係数は、絶対値が.03から.22の範囲であり、いずれも有意性は示されなかった。

表1 子育てへの態度尺度 因子分析結果

項 目 内 容	因 子 負 荷 量				共通性
	因子1	因子2	因子3	因子4	
<子育てに対する積極的受容>					
1 子育てを楽しいと思う	.69	-.07	-.04	.16	.50
5 母親であることに、充実感を感じている。	.66	-.06	-.03	-.10	.45
10 子どもと一緒に過ごす時、幸せだと感じる。	.62	-.18	.01	.28	.50
13 母親としてふるまっているときの自分を好きだと思う。	.55	-.04	.13	-.09	.36
14 子どもを育てる中で、人間的に成長できたと思う。	.51	.17	-.09	-.26	.37
<子育てや子どもへの否定的意味づけ：子どもの行動を否定的に解釈する傾向、役割逆転的な傾向>					
4 子どもが思うようにならず、しょっちゅうイライラする。	-.32	.42	.03	.13	.29
7 子どもは、わたしのことを嫌っているのではないかと、思うことがある。	-.07	.61	.25	.08	.45
8 時々、子どもは、わざとわたしを怒らせるようなことをする。	.03	.73	-.01	.03	.53
15 子どもは一方的に甘えてくるだけなので、時々うんざりしてしまう。	-.34	.47	-.02	-.05	.34
16 子どもは、わたしを挑発してくることがある。	.07	.65	-.13	.16	.47
<子どもとの境界の弱さ：子どもを自分自身の延長とみなし、子ども自身の意志や自主性を認めにくい傾向>					
2 子どもを、片時も自分のそばから離したくないと思う。	.21	-.04	.56	.19	.40
9 子どもは、わたしの分身だと感じる。	.15	.18	.51	.18	.34
12 わたしの生きがいは、子どもだけがすべてというわけではない。	.07	.10	-.54	.01	.30
17 子育ては、やりがいのある有意義な仕事だと思う。	.34	-.06	-.47	.25	.40
19 わたしの言いつけが子どもの気持ちに沿わない時に、子どもが嫌がるのは、あたりまえだと思う。	.09	.04	-.41	-.00	.18
<環境への不安：子どもを取り巻く外界に対する漠然とした不安>					
6 子どもがわたしの知らないところで誰かに傷つけられないか、心配に思う。	.05	.23	.12	.69	.55
18 子どもを、少しでも自分の目の届かないところに置くのは、不安だ。	-.04	.02	.44	.56	.51
20 子どもに何か危険が及ぶのではないかと、いつもなんとなく心配している。	-.11	.10	-.03	.71	.53
3 誰かに子どもをあずけても、だいたい安心していられる。	.03	.27	-.35	.26	.26
11 いくら自分の子どもでも、そうそう親の思うようになるはずがないと思う。	.18	-.07	-.23	-.00	.09
21 子どもをかわいと思う気持ちが、わたしを支えてくれる。	.14	.07	.24	.03	.08
因 子 寄 与	2.35	1.99	1.81	1.77	7.92

*因子負荷量が負の値を示したものは、得点を逆転させて合計した。

愛着尺度については、佐藤（1993）にならって、3つの尺度得点を算出した。 α 係数は、「安定した愛着」が.67、「不安」が.59、「拒否」が.71であった。下位尺度間の相関については、「安定した愛着」と「拒否」の間に有意な負の相関（ $r = -.49$, $p < .01$ ）が見られた。他では有意性は示されなかった（「安定した愛着」と「不安」の間は $r = .07$ 、「不安」と「拒否」の間は $r = .15$ ）。

表2 夫または友人への愛着を測定した尺度の項目内容

項	目	内	容
＜安定した愛着：愛着対象への安心感や必要に応じた接近・依存傾向＞			
			心配事や悩みがあるとき、その人に話したいと思う。
			その人に励ましてもらおうと、元気が出る。
			その人は、わたしの良い面も悪い面もわかってきている。
			その人に、素直な気持ちを話すことができる。
			つらいときや悲しいとき、その人を思い出す。
＜不安：愛着対象との関係性への不安、関係を離れた個人としての自己への不安＞			
			できれば、その人とだけ、いつも一緒にいたいと思う。
			その人に対して、必要以上に気をつかってしまうことがある。
			その人には、わたし以外の誰とも、あまり親しくしてほしくない。
			その人がいなければ、わたしは何もできないと思う。
			わたしはその人のことで、よく不安になったり、いらだったりする。
			その人には、わたしの知らない世界を持ってほしくないと思う。
			その人がわたしから離れていくのがこわくて、本当の気持ちを言いにくいときがある。
＜拒否：愛着対象への拒否、愛着関係の拒否＞			
			その人に対して、本当には心をゆるしていない部分がある。
			たとえその人とでも、一緒にいると、むしろ一人になりたくなることがある。
			その人とは、今は親しくしているが、いずれ、それほどでもなくなってしまうような気がする。
			たとえその人でも、あまりわたしの心の中に、ふみこんできてほしくない。
			その人には、本当のわたしは理解できないと思う。

(2) 子どもと母親の属性による尺度得点の差異

子どもの月齢、性別、きょうだい数、出生順位と、母親の年齢によって、子育てへの態度尺度の各尺度得点に見られる差異を検討した（表3を参照）。「環境への不安」得点において、きょうだい数による差異に統計的有意性が示され、ひとりっ子を持つ母親は二人以上の子どもを持つ母親よりも、「環境への不安」得点が高かった。それ以外については、子ども・母親の属性による得点の差異は見られなかった。

(3) 愛着対象として選択された対象による尺度得点の差異

主要な愛着対象としては、大多数の母親（57名、81%）が夫を選択し、その他には友人を選択した母親が8名（11%）、自分のきょうだいを選択した母親が4名（6%）いた。夫を選択した人と、友人やきょうだいを選択した人に見られる愛着尺度得点の差異について検討したところ（表4を参照）、「不安」においてのみ有意な差が見られ、夫を選択した群のほうが得点が高かった。

(4) 愛着尺度と子育てへの態度尺度の関連

母親の主要な対人関係と子育てへの態度との関連を検討するため、まず愛着尺度と子育てへの態度尺度それぞれの下位尺度得点どうしの、相関係数を求めた（表5を参照）。愛着対象として選択された対象によって、関連の傾向には大きな違いが見られなかったため、一括して分析した結果について報告する。まず愛着尺度の「安定した愛着」については、子育てへの態度尺度の「積極的受容」と有意な正の相関が、また「否定的意味づけ」とは有意な負の相関が、「境界の弱さ」とも有意な負の相関が示された。愛着尺度の「拒否」については、子育てへの態度尺度の

「否定的意味づけ」と有意な正の相関を示した。愛着尺度の「不安」は、子育てへの態度尺度の「否定的意味づけ」ならびに「境界の弱さ」のそれぞれと正の相関を示した。

表3 子どもと母親の属性による子育てへの態度尺度得点の平均値（カッコ内は標準偏差）

			子 育 て へ の 態 度			
n			積極的受容	否定的意味づけ	境界の弱さ	環境への不安
子どもの月齢	60ヶ月以上	33~34	19.55 (3.02)	11.55 (3.61)	9.35 (2.98)	8.00 (2.89)
	60ヶ月未満	38	19.05 (3.20)	12.58 (4.16)	9.82 (3.25)	7.58 (2.86)
	t		.66	1.11	.63	.62
子どもの性別	男	25~26	19.68 (3.58)	11.81 (4.20)	10.27 (3.13)	7.46 (3.01)
	女	44~45	19.00 (2.84)	12.20 (3.81)	9.29 (3.06)	7.91 (2.81)
	t		.87	.41	1.29	.63
きょうだい数	1	14~15	17.87 (2.97)	11.57 (3.20)	9.47 (2.29)	9.47 (2.61)
	2	39~40	19.28 (3.15)	12.30 (4.08)	10.03 (3.39)	7.40 (2.97)
	3~4	15	20.33 (2.85)	11.40 (4.01)	9.07 (3.01)	7.20 (2.24)
	F (df)		2.48 (2.66)	.37 (2.66)	.57 (2.67)	3.51*(2.67)
出生順位	1	40~41	19.28 (3.23)	12.50 (3.73)	9.90 (3.20)	8.10 (2.96)
	2~4	30	19.20 (3.01)	11.47 (4.17)	9.30 (2.98)	7.27 (2.73)
	t		.09	1.09	.81	1.21
母親の年齢	34歳以上	37~38	18.83 (3.05)	11.73 (3.84)	9.39 (2.98)	7.42 (2.54)
	34歳未満	34	19.76 (3.14)	12.50 (4.02)	9.82 (3.28)	8.18 (3.17)
	t		1.26	.83	.58	1.12

* p<.05

表4 選択された対象ごとの愛着尺度得点の平均値（カッコ内は標準偏差）

選 択 さ れ た 対 象	n	愛 着 尺 度		
		安定した愛着	不 安	拒 否
夫	57	21.12(3.05)	15.89(4.01)	11.82(4.38)
友人・きょうだい	12	20.75(2.38)	11.83(4.73)	10.25(3.47)
t		.40	3.09**	1.16

** p<.01

表5 子育てへの態度尺度と愛着尺度の相関

		子 育 て へ の 態 度			
		積極的受容	否定的意味づけ	境界の弱さ	環境への不安
夫または友人への	安定した愛着	.31**	-.30**	-.29*	-.15
	拒否	-.21	.25*	.21	-.00
	不安	-.03	.33**	.35**	.19

n=69~70 **p<.01 *p<.05

次いで、母親の子育てへの態度には、対人関係のどの側面がより大きな予測力を持つのかを検討するため、子育てへの態度尺度の各下位尺度得点を基準変数、愛着尺度の各下位尺度得点を説明変数として、重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（表6を参照）。子育てへの態度尺度の「積極的受容」に対しては、愛着尺度の「安定した愛着」が有意な偏回帰係数を示した。子育てへの態度尺度の「否定的意味づけ」に対しては、まず愛着尺度の「不安」が、次いで「安定した愛着」が、有意な偏回帰係数を示した。子育てへの態度尺度の「境界の弱さ」に対しても同様に、まず愛着尺度の「不安」が、次いで「安定した愛着」が有意な偏回帰係数を示した。

表6 子育てへの態度の重回帰分析結果

基 準 変 数 (子育てへの態度)	説 明 変 数 (夫・友人との関係)	標 準 偏 回 帰 係 数	R ²
積極的受容	安定した愛着	.36**	.13**
否定的意味づけ	不安	.34**	.17**
	安定した愛着	-.24*	
境界の弱さ	不安	.37**	.19**
	安定した愛着	-.26*	
環境への不安	/	/	n.s.

**p<.01 *p<.05

考 察

(1) 子育てに対する態度尺度の作成

本研究では、子育てにおける母親の心理状態を測定するための新たな尺度を作成した。この尺度は、育児ストレスのような、育児プロセスの結果として母親に現れた心理的兆候よりも、養育行動を生み出す根底にある母親の態度・傾向を測定しようとするものである。役割逆転的な期待や子どもの行動に対して否定的に解釈しがちな傾向、そして子どもへの密着傾向等の測定をねらうものであった。

尺度の因子分析の結果、子どもへの密着傾向には、当初想定していなかった「子どもが期待どおりに動くことを期待する傾向」に関わる項目の一部が新たに加わり、また「子どもを取り巻く環境への不安」に関わる項目が抜けて、「子どもとの境界の弱さ」という下位尺度となった。子どもの行動を否定的に解釈する傾向と同様に、子どもに密着する傾向にも、暗黙のうちに子どもを母親の期待を満たすものとして位置づけている傾向、すなわち役割逆転的な傾向が関連していることが示唆された。内的一貫性を示す α 係数がやや低めであり、また下位尺度によっては構成する項目数が十分とは言えないなど、まだ今後の検討を待たねばならない点も多いが、上に述べたような母親の態度が、一定の変動を示す測定可能な行動傾向であることが示唆された。

(2) 愛着尺度と子育てへの態度尺度の関連

愛着尺度と子育てへの態度尺度の関連を調べた結果からは、以下のことが明らかになった。母親が主要な対人関係において、安心感を抱き、必要に応じて相手にうまく依存したり接近したりできるような関係を築いているほど、子育てに対する積極的受容の程度が高く、子どもの行動を否定的に解釈する傾向が低く、子どもとの境界の弱さも低いことが示された。これは、夫や周囲

の人との協調的な関係が、母親の育児における良好な心理状態と関連することを示すいくつかの結果（Howes&Markmann,1989；Levy-Shiff,Dimitrovsky,Shulman&Har-Even,1998；Shea&Tronick,1988；他）と一致するものである。母親を取り巻く周囲の人の支援のあり方によって、母親の心理状態は影響を受ける。そしてそれは、単に肯定的感情や自尊心が高まるというだけではない。母子の調和的な関わりにとって関連の深い、子どもの行動の解釈の仕方や、子どもとの境界のあり方なども、母親を取り巻く対人関係と密接に関連しているようである。

ところで本研究では、母親の周囲の人がいかに支援的であるかというポジティブな側面だけでなく、その同じ相手との関係性における、ネガティブな側面をも測定している。それは、人間関係の支援的側面だけでなく、むしろ不調和で葛藤的な側面こそが、人の心理的適応状態のより重要な規定因となるという主張があるからである。この観点から次の結果を見てみる。主要な対人関係において、相手を拒否する傾向の高い母親ほど、子どもの行動への否定的解釈傾向が強かった。また、対人関係において不安傾向の高い母親ほど、子どもの行動への否定的解釈傾向が高く、子どもとの境界も弱い傾向にあった。対人関係におけるネガティブな側面の強さは、子育てへの態度における望ましくない側面の強さに関連している。この結果は、母親の心理状態の少なくとも望ましくない側面を問題にする時には、単に対人関係の支援的な関係性だけを取り上げるのでは不十分であることを示すものであり、Vinokur & vanRyn（1993）やRock（1988）などを支持する結果となった。

さて、このことと関連して、Major,Zubek,Cooper & Cozzarelli（1997）やRuehlman & Wolchik（1988）の結果に示唆されるような、ネガティブな対人関係はネガティブな心理的状态と、ポジティブな対人関係はポジティブな心理状態と関連するという仮説についてはどうだろうか。母親の子育てへの態度を対人関係から予測する重回帰分析を行なった結果は、以下のものであった。子育ての積極的受容に対しては、対人関係における安定した愛着が唯一の有意な予測力を持っていた。一方、子どもの行動への否定的解釈傾向に対しては、まず対人関係における不安傾向が主たる予測力を持つ変数として挙がり、次いで安定した愛着の傾向が挙げられた。また子どもへの境界の弱さに対しても同様に、まず対人関係における不安傾向が主たる予測力を示し、安定した愛着の傾向がこれに次いだ。これらから、対人関係のポジティブな側面は心理的状态のポジティブな側面と、ネガティブな側面はネガティブな側面と関連するという仮説は、部分的に支持されていると言える。

本研究の結果をまとめると、まずひとつには、母親の主要な対人関係が安定しているほど、育児を積極的に受容できていることが示された。この結果は、「育児ストレスに立ち向かう母親を周囲の人がサポートする、その結果として母親の心理状態が良好になる」という従来のソーシャルサポートの図式を支持するものである。しかしこれに加えて本研究では、対人関係のネガティブな側面もまた、母親の子育てにおける内的経験や態度を規定するものとして、一定の意味を持つことが明らかとなった。本研究で着目した「子どもの行動の解釈の仕方」や「子どもとの境界のあり方」は、育児プロセスの結果として母親が体験する情動というよりは、母親の養育行動の基盤となる母親自身の子どもへ態度である。本研究では、母親の主要な対人関係の不安定さや拒否的傾向が強いほど、子どもの行動の解釈の仕方や子どもとの境界のあり方が適応的でないものになることが示された。ここでいう「適応的ではない」とは、否定的感情の投影や、役割逆転傾向、密着傾向などが強いことを示す。この結果は、母親が、無自覚的ではあっても、周囲の人との関係を何らかの意味で補償するものとして母子関係を位置づける、という図式をも示唆するものと言える。

今後は、子育てに関する尺度の改訂を進めるとともに、母親の対人関係については、主要な関係のみではなく、ネットワークの少なくとも主要な領域を全体的に捉える工夫が必要である。

引用文献

- Ainsworth, M.D.S., Blehar, M.C., Waters, E., & Wall, S. 1978 *Patterns of attachment: A psychological study of the strange situations*. San Diego, CA: Academic Press.
- Ainsworth, M.D.S. 1989 Attachment beyond infancy. *American Psychologist*, 44, 709-716.
- Cutrona, C.E. 1984 Social support and stress in the transition to parenthood. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 378-390.
- Howes, P. & Markmann, H.J. 1989 Marital quality and child functioning: A longitudinal investigation. *Child Development*, 60, 401-409.
- Jorgensen, E.C. 1992 *Breaking the deadly embrace of child abuse*. New York: Crossroad.
(門真一郎・山本由紀・松林周子訳 虐待される子どもたち 1996 星和書店)
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 東京大学出版会
- Kochanska, G. 1998 Mother-child relationship, child fearfulness, and emerging attachment: A short-term longitudinal study. *Developmental Psychology*, 34, 480-490.
- Ladd, G.W. & Ladd, B.K. 1998 Parenting behaviors and parent-child relationships: Correlates of peer victimization in kindergarten? *Developmental Psychology*, 34, 1450-1458.
- Levy-Shiff, R., Dimitrovsky, L., Shulman, S., & Har-Even, D. 1998 Cognitive appraisals, coping strategies, and support resources as correlates of parenting and infant development. *Developmental Psychology*, 34, 1417-1427.
- Major, B., Zubek, J.M., Cooper, M.L., & Cozzarelli, C. 1997 Mixed messages: Implications of social conflict and social support within close relationships for adjustment to a stressful life event. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 1349-1363.
- 牧野カツコ 1982 乳幼児を持つ母親の生活と育児不安 家庭教育研究所紀要, 3, 43-56.
- 西澤 哲 1994 子どもの虐待: 子どもと家族への治療的アプローチ 誠信書房
- 野澤みつえ 1989 親業ストレスに関する基礎的研究 関西学院大学文学部教育学科研究年報, 15, 35-56.
- 大日向雅美 1988 母性の研究: その形成と変容の過程 川島書店
- Rock, K.S. 1984 The negative side of social interactions: Impact on psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 1097-1102.
- Ruehlman, L.S. & Wolchik, S.A. 1988 Personal goals and interpersonal support and hindrance as factors in psychological distress and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 293-301.
- 佐藤朗子 1993 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 40, 215-226.
- 佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 1994 育児に関するストレスとその抑うつ重症度との関連 心理学研究, 65, 409-416.
- Shea, E. & Tronick, E.Z. 1988 The maternal self inventory: A research and clinical instrument for assessing maternal self-esteem. In Fitzgerald, H.E., Lester, B. M., & Yogman, M.E. (Eds.), *Theory and research in behavioral pediatrics: Vol.4*. New York: Prenum.

- Vinokur, A.D. & van Ryn, M. 1993 Social support and undermining in close relationships : Their independent effects on mental health of unemployed persons. *Journal of Personality and Social Psychology*, 65, 350—359.
- Waters, E. & Deane, K.E. 1985 Defining and assessing individual differences in attachment relationships : Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In Bretherton & Waters, E. (Eds.) , *Growing points of attachment theory and research : Monographs of the society for research in child development*, 50, 41—65.